

Der Kreisdenker Jakob Böhme(2)

Yasuo OKAMURA

Als die früheren Gedanken Jakob Böhmes sind die folgenden sehr merkwürdig.

(1). Die „zwei Qualitäten“, genannt eine gute und eine böse, sind in allem Wesen ineinander wie ein Ding. Sie sind also da als „eins und doch zwei“ und als solches das dynamische erklärende Prinzip alles Wesens, das letztlich auf die zwei gleich ewigen Prinzipien in Gott zurückgeht.

(2). Die „sieben Qualitäten“ sind auch „gleich ewig“ und dringen sich durcheinander. Sie zirkulieren immer sich und sind also alle die erste und die letzte. Dieser Zirkel schildert überhaupt den göttlichen Urstand, worin die „heilige Wonne“ quellend wallt. Er drückt denn auch das Bewegen vor der christlichen teleologischen Bewegung aus.

(3). Die „drei Prinzipien“ sind vielleicht aus Paracelsus genommen und doch auch Böhmes eigene Auslegung von der christlichen Dreieinigkeit. Das erste Prinzip ist zunächst das begierde und anziehende, das auf „die Tiefe der Geburt Gottes“ deutet. Das zweite ist dann das Licht-Prinzip, das gegen dem ersten finsternen Prinzip wirkt, und da wird ein ewiges freudenreiches Spiel beider. Und das dritte ist zuletzt das äußere Prinzip, das das Licht- und Finsternis-Prinzip ist und damit diese unsere Welt herrscht .

(4). „Ungrund“ bedeutet überhaupt den letztlichen Ort, aus dem alles geboren wird und zu dem alles zurückkehrt. Er ist zuerst als „Nichts“ und also weder „Licht“ noch „Finsternis“. Aber zugleich ist er auch sowohl „Licht“ als „Finsternis“, weil er als Urwille wieder alles willt.

(5). „Seele“ hat eigentlich die ungründliche Freiheit ,die einerseits hinter sich in die ewige Finsternis und andererseits vor sich in das ewige Licht geht. Vor diesem Entweder-Oder lebt Seele immer frei und ist von nichts gedrängt. Denn Seele ist überhaupt aus dem Zentrum der ewigen

Natur gekommen , das „die Tiefe der Gottesgeburt“, d.i. die Selbsterkenntnisgrund Gottes ist , und sie ist als das aus solcher Tiefe oder aus solchem Grund Herkommende ungründlich und frei.

ヤーコプ・ベーメの初期思想（2）

岡村康夫

第三章 『人間の三重の生について』

ベーメの『人間の三重の生について』という作品は、先述の『三つの原理について』という作品および後述の『魂についての四十の問い』という作品と密接な関係にある。すなわち、この三つの作品はそれらが書かれた時期においても、またその内容においても極めて近接している。上述したように⁽¹⁾、ベーメはゲルリッツ参事会の執筆禁止命令に従って、おおよそ七年の間沈黙を守っていた。その沈黙の期間にベーメが取り組んだものが、時期的にはハンス・グルンスキーによると1619年の1月頃から1620年の春までの間に、この三つの作品のうちへ堰を切ったように流れ込んでいる⁽²⁾。そして、それらの作品のなかで最初のうちは未消化のままであったものが、次第にベーメ固有の思想へと高められている。そこでは内容的には、神性の自己展開という形而上学的神智学的問題と、魂の新生という実践的神秘主義的問題とが錯綜する形で展開されている。この錯綜がベーメ思想を難解にする原因でもあるが、むしろそこに彼固有の生き生きとした思想展開を見ることも可能であると思う。ここでは先述の『三つの原理について』においては充分確認されないが、この『人間の三重の生について』において特に際立って現われているベーメの思想展開の特色を取り出したい。

さて、この『人間の三重の生について』に先立って1619年の11月半ば頃書かれたとされる『三つの原理について』の「補遺」のタイトルがすでに『人間における三重の生の根本的にして真実の記述』である⁽³⁾。そこでは、すべてが「一つの源泉」から由来していること⁽⁴⁾、すなわち、神が自己自身のうちに「三つの原理」をもち、みずから「すべての存在者の本質」であるということと同様に、「神の似姿」である「人間の心情」も「三つの原理」を自己においてもっているということ、そこから人間にはこの地上にあって「真剣さ」が要求され、われわれは「生まれ変わらねばならない」ということ等が述べられている⁽⁵⁾。『人間の三重の生について』の展開はこの『三つの原理について』

の「補遺」の敷衍であると言える。

註

- (1) 第二章の冒頭参照。『山口大学哲学研究』第四巻、33頁。
- (2) Jacob Bohme Sämtliche Schriften, Faksimile-Neudruck der Ausgabe von 1730 in elf Bänden, neu herausgegeben von Will-Erich Peuckert, Zweiter Band, Einleitung, [8]
ポイケルトは、7年あるいは6年と言われるこのペーメ沈黙の期間を、1613年の7月30日から1617年の間と確定し、この期間を「極めて重要な時代」と考えている。そして、ポイケルトはこの期間にペーメが多くの学識あるマイスターの著作と取り組んだと述べ、ペーメ思想の三つの源泉として、パラケルズス、シュベンクフェルト、ヴァイゲルの名前を挙げている。
- (3) *ibid.*, S. 483,
Appendix. Das ist:Gründliche und wahre Beschreibung des Dreyfachen Lebens im Menschen.
- (4) *ibid.*, S. 484
- (5) *ibid.*, S. 488~490

第一節 われわれのうちなる永遠の生

先の『黎明』や『三つの原理について』に対するこの『人間の三重の生について』の大きな視点の転回は、まずわれわれのうちなる「永遠の生命」の主張にある⁽¹⁾。すなわち、われわれは確かに有限な「外的生命」のうち生きてはいるが、同時にわれわれのうちには「永遠で不滅である生命」があるというのである。ただし、この「永遠の生命」は人間のうちに直接的にあるいは即自的にあるのではない。この点に関してペーメは次のように述べている。

(魂の飢え)「外的生命」は初まりと終わりをもち肉体は腐敗をもって終わるが、魂のうちには「他より高く、より善い生命」への、すなわち「神的生命」と呼ばれるものへの「大いなる飢え」がある。そもそも各々の生命は自分がそこから生まれ出た母を渴望する。例えば木は火の母であり、また火は木を渴望する。火はもしその母である木から切り離されると消えてしまう。それゆえ火は絶えず木を渴望する。魂の「飢え」もこれと同様である。⁽²⁾

(魂の起源)また魂が生まれ出るところについては次のように述べている。

魂は肉体のうちに住み、「星々や諸元素の霊」によって取り囲まれている。しかし魂は「他の糧」をもち、「他の原理」のうちに生きている。魂の「諸本性 (Essentien)」は「星辰」から由来しているのではなく、その初まりと「身体的結合 (corporliche Vereinigung)」を「永遠なる紐帯 (das ewige Band)」から、すなわち「永遠なる自然」から得ている。ただしこの「永遠なる自然の紐帯」は神のうちにあるが、「神の霊」はこれに服してはいない。この「紐帯」は「神の核心」である「言葉」によって照らし出されることによって、「聖なる喜び (eine heilige Wonne)」に沸き立つものとなる。(3)

(魂の墮落)とところでまた魂がこの「永遠なる自然」に由来するということに、魂の「苦悶 (Qual)」あるいはその墮落の遠因がある。次のように述べている。

「神の光」の外にある「永遠なる自然」のうちには「不安に満ちた苦悶」がある。というのは、「永遠なる自然」は「生命の紐帯」ではあるが、それは「神の光」の外では「火 (Feuer)」のうちにあるからである。この「火」が「聖なる神の愛」に捉えられる場合には、生命には「神の光」が開かれ、それは神のうち生きることになる。しかし、われわれの魂は「この世の精神」において「見知らぬ宿 (fremde Herberge)」へ入った。そして魂は「神の光」を捨てた。ここに魂の「恐るべき大いなる墮落」がある。それゆえ、魂は生まれ変わらねばならない。以上のように述べている。(4)

(魂の新生)またさらに、この魂の生まれ変わりについては次のように述べている。

魂は自分自身の「諸本性」によって「神の光」のなかへ入っていくことはできない。それはちょうど「永遠なる自然」が「神の光」のなかへ突き進むことができず、それを自分の力のうちにもたないのと同じである。「神の光」はその原理である「愛」から「永遠なる自然」のうちで輝き、かくして「永遠なる自然の主」であり続ける。したがって、その「永遠なる自然」から由来する魂も、自分の「諸本性」をもって「神の光」のうちへ突き進むことはできず、またそれを自分の支配下に置くこともできない。その光のなかへ入っていくためには魂は生まれ変わらねばならない。ここに「魂における新生 (neue Geburt in der Seele)」ということが語られる。その場合、魂は「星辰および元素的生命」から外へ飛び出さねばならないのみならず、自分自身の生命の源泉である「永遠なる自然」からも外へ出て、自分の意志を神の生命のうちで汲み出さねばならない。この意志は神によって受け容れられ、神はこの意志のうちに住

む。このようにして「神的生命と光」とは魂のうちへ現われ、魂は神の子となることができる。(5)

(神の受肉・キリスト)ただし、魂は自分自身の力で生まれ変わることはできない。そこで神は愛と恩寵から、肉のうちにあるわれわれのもとに現われ、すなわち一人子・キリストをわれわれのもとに送り、われわれの魂を再び自己のうちへ、すなわち「神的生命」のうちへ受け入れたのである。このようにして、われわれはキリストにおいて生まれ変わり、再び「神の生命」へ入ることができるのである。(6)

以上のようなわれわれのうちなる「永遠の生命」の主張が、次に取り扱う『魂についての四十の問い』によってさらに徹底・深化されて、後のペーメの実践的神秘主義的思想の基礎となるものであると言えると思う。ここで特に注目しておきたいことは、①魂は単なる「外的生命」に由来するものではなく、「神的生命」の中心をなす「永遠なる自然」から生起しているものであるということ、またそれゆえに②その「永遠なる自然」のうちに魂の「神的生命」からの離反の可能性があるということ、ただし③その「永遠なる自然」のうちには「闇」と「苦悶」があるが、それは「神の霊」に服し「神の言葉」に照らされることによって「聖なる喜び」に沸き立つものとなるということ、以上である。

註

(1) ペーメの思想展開の中核にあるのは魂のうちなる神秘的経験である。その神秘的経験から彼の神、人間、世界が展開される。「神性の深み」も「自然の最内奥の根底」も、その内面的神秘的経験から語り出される。その叙述が錯綜するところに、ペーメ思想の難解さがあると同時に独自性がある。ここでは、この点を考慮しつつ、彼の思想の基盤となるものを取り出したい。

(2) *ibid.*, S. 3~4

この「魂の飢え」については、特に1624年の『キリストへの道 (Christosophia oder Der Weg zu Christo)』の第一書、『真の懺悔 (De Poenitentia Vera oder Von wahrer Busse)』において主題的に取り扱われる。

(3) *ibid.*, S. 5

「永遠なる自然」から生まれる魂にも、「神の核心」である「言葉」に照らされることによって、この「聖なる喜び」に参入する可能性が開かれている。

(4) *ibid.*, S. 6

(5) *ibid.*, S. 6

(6) *ibid.*, S. 7

第二節 永遠なる意志

さて、それでは以上のような魂の「苦悶」の源泉であり、またその墮落の遠因ともなる「永遠なる自然」は、そもそもいかにして生起したのか。この点に関して、先の『黎明』や『三つの原理について』では充分確認されず、この『人間の三重の生について』において初めて顕著に述べられるのが「永遠なる意志 (der ewige Wille)」の立場である。

(無、永遠の静寂) この「永遠なる意志」以前には「闇」も「光」もなく、すべては「無」であり、そこにあるのは「永遠の静寂 (ewige Stille)」⁽¹⁾のみである。例えば、次のように述べられている。

「さて、この意志は永遠である。それは無から、すなわち自己自身からの由来する。もしこの意志が存在しなければ、すべては無であり、闇も光もないであろう。もし何かがあるとすれば、それは、すなわち創造の奇蹟として、渋く、渴望するものであるところの永遠の意志である。」⁽²⁾

このようにこの作品においては、特にすべては「永遠なる意志」から初まることが強調されている。ただし、この意志は直線的に「顕示 (Offenbarung)」へと向かうものとは考えられていない。むしろその顕示に反する動きが、それに先行する。

(渴望、収縮、懐胎、闇) すなわち「永遠なる意志」は、例えば今引用した言葉のなかにも確認されるように、まず「渋く、渴望するもの」としてある。「渋味」は上述した『黎明』では、「七つの性質」の第一のものであったが、ここではそれは「渴望」、すなわち自己を自己自身へと引き寄せる自己収縮的な最原初の動きを表現するものとして使用される。そして、そのような動きによって「無」から「闇 (Finsternis)」が生成する。次のように述べられている。

「ところで意志は永遠の渴望であり、それはまた永遠に自己収縮する。しかしそれは、そこに引き寄せることのできる何ものももたず、自己自身を引き寄せ、自己懐胎し、かくして無から闇が生成する。」(傍点筆者)⁽³⁾

(渋味と苦味の棘)

この「闇」こそ「すべての存在者の根原 (der Urkund alles Wesens)」で

あるが、それを構成するものとして、ここではまた先の「渋味」とさらに「苦味の棘」とが挙げられ、次のように述べられている。

「ところで、二つの形態、すなわち渋味と苦味の棘とがすべての存在者の根原である。そして永遠なる意志は、二つの形態がそこで生まれる母である。」(傍点筆者)⁽⁴⁾

ここで「存在者の根原」あるいは「母」と呼ばれているものが先の「闇」に相当するのであるが、ただ「渋味」と「苦味の棘」とは単純に静的にこの「闇」を構成するものとは考えられていない。一方では「渋味」は激しく収縮し、他方では「苦味の棘」はそれを耐えられず、一層激しく動く。「渋味」は逆にまたその「動き」を耐えられない。そして「苦味の棘」はさらに「渋味」から外へ出ることを渴望するが、「渋味」に引き留められ外へ出ることができない。このようにして、「渋味」と「苦味の棘」とは「収縮」と「破碎」とを繰り返し、遂にはそれは「車輪 (Rad)」のように「廻転するもの (drehend)」となる。⁽⁵⁾

(もう一つの意志) さて次に、このような「廻転する車輪」から「脱去 (entfliehen)」しようとするものが、この作品では「もう一つの意志 (ein anderer Wille)」として立てられている。次のように述べられている。

「ところでまた意志は懐胎をとまなう収縮を耐えることはできない。というのは、意志は自由であろうと欲するからだ、しかしそれは許されない。というのは、意志は渴望するものであるからだ。それで意志は自由とはなれず、引き寄せによって自己のうちに進み、自己のうちに、闇から外へ出て自己自身のうちへ向かうもう一つの意志を把捉する。」(傍点筆者)⁽⁶⁾

(意志と反意志) しかし、この「もう一つの意志」も直ちにこの「車輪」のような廻転運動から脱け出すことはできない。それゆえ「意志」は自由となることができず、「大きな不安 (grosse Angst)」に陥る。しかしまた、そもそもこのように「意志」がつねにそれに抗するもの、「反意志 (Widerwille)」に出会うということが、「顕示」には不可欠である。次のように述べられている。

「実際、広がりとは静寂のうちには顕示はないであろう。それゆえ、顕示がそこから現われ出るところの引き寄せと閉塞があらねばならない。このようにしてまた、反意志があらねばならない。というのは、明るい静寂な意志は無のようであり、何ものも産まないからである。」(傍点筆者)⁽⁷⁾

以上のように、この作品においては「意志」の立場が前面に出された展開が

なされている。このような「意志」と「反意志」とは、さらに「一つの中心から由来する二つの永遠なる原理 (die zwei ewige Principien aus einem Centro)」⁽⁸⁾であると言われる。

(永遠なる自然) さて次に、ペーメはこの作品では「永遠なる自然」を、このような「二つの永遠なる原理」とされる「意志と反意志」とから展開している。まず次のように述べている。

「二つの意志が一つの本質のうちにあり、それらは二つの原理を引き起こす。一つのは愛であり、他のものは怒り、すなわち憤りの苦悶である。」⁽⁹⁾

そしてさらに次のように述べている。

「第一の意志は神とは呼ばれず、自然と呼ばれる。第二の意志は、永遠から永遠へAにしてO、初めにして終わりと呼ばれる。そして、第一の意志のうちでは自然は顕わではなかった。第二の意志が自然を顕わにする。実際、それは強さのうちの力である。そして一方は他方なしには無であろう。」⁽¹⁰⁾

以上のように、この『人間の三重の生について』という作品のなかでは、特にその主張の核心部分に「意志」の立場を確認できる。ここでは、この「意志」の立場、すなわち「意志と反意志」との関係から、「永遠なる自然」および魂の離反の問題が解明されているのである。

さて、この『人間の三重の生について』という作品において、われわれはまず魂のうちなる「永遠なる生命」の記述に注目した。それから、特にこの作品において際立って顕著になった意志の立場を確認した。これらはいずれもペーメの主張の核心部にあつて、彼固有の思想展開の基盤となるものである。

註

(1) *ibid.*, S. 11

(2) *ibid.*, S. 9

(3) *ibid.*, S. 9

(4) *ibid.*, S. 10

(5) *ibid.*, S. 10~11

(6) *ibid.*, S. 10

(7) *ibid.*, S. 11

(8) *ibid.*, S. 14

(9) *ibid.*, S. 19

(10) *ibid.*, S. 19~20

第四章 『魂についての四十の問い』について

この著作において初めてわれわれは、ベーム思想の究極概念となる「無底 (Ungrund)」に出会う。もちろん、先にも指摘したようにその発想の萌芽となるものは、「神性の深み」という形で、すでに『黎明』においても確認された⁽¹⁾。また『人間の三重の生について』にも次のような箇所がある。

「神のみが永遠なる初まりであり、産出する者のために中心を把握する。その中心は、すべての存在者の本質を産出する者の永遠の母を成す。というのは、神は初まりをもたず、神以前には何も存在しないからである。しかし神の言葉は、神のうちに永遠の無底的初まりをもち、永遠の無底的終わりをもっている。」(傍点筆者)⁽²⁾

「神性の深み」あるいはすべてのものの「無底的 (ungründlich)」初まりにして終わりであるところのもの、それがこの『魂についての四十の問い』においては「無底」として表現される。

註

(1) 拙論、第一章、註(2)および第一章第五節、註(5)参照。『山口大学哲学研究』第四巻、24頁および32頁。

(2) *ibid.*, S. 39~40

第一節 無 底

「無底」は上述したようにベーム思想の究極概念である。ここではまずそれがこの著作では、いかなる文脈において現われてくるかを確認したい。

(永遠なる静寂) さて、「魂はどこから生起したのか」という問いに対して、ベームは万物の起源に遡及する。「万物は永遠から生起し、由来している」⁽¹⁾が、そもそもその最初にあるのは「永遠なる自由」としての「永遠なる意志」である⁽²⁾。ただし、この意志は『人間の三重の生について』においても述べられていたように、まず「欲動」あるいは「渴望」としてある。この意志の渴望的「引き寄せ」によって「渴望」は自己自身を孕み、そこに「闇」が生成する。この「闇」は単なる否定的消極的なものではなく、積極的能産的な万物の源泉である。ベームは、このような「闇」を孕む「渴望」以前にあるのは「無」であり、「永遠なる静寂 (eine ewige Stille)」であると言う。⁽³⁾

(眼あるいは鏡の譬喩)次に、「闇」でも「光」でもなかった「永遠なる静寂」が「渴望」によって動き始めるところ、それはこの作品においても、これまでの著作と同様に「自己を自己自身のうちで産み出す車輪 (ein Rad, das sich in sich selber gebietet.)」の動きに譬えられている⁽⁴⁾。しかし、ここではさらにそれが「鏡 (Spiegel)」あるいは「眼 (Auge)」の譬喩によって言い表わされている。例えば、次のように述べられている。

「しかし大いなる広がり (grosse Weite) には根底がない (ohne Grund) のであるから、そこには数も終わりも、また初まりもない。そうしてそれは鏡に等しい。すなわち、それは一切であり、しかもまた無としてある。」(傍点筆者)⁽⁵⁾

あるいはまた次のように述べられている。

「それから、それは眼に等しい球であり、神の不可思議な眼 (Gottes Wunder=Auge) である。そこでは永遠からすべての存在者が見られているが、ちょうど鏡や眼のなかのようにそこには存在者はない。」(傍点筆者)⁽⁶⁾

(無底の眼)ここで言われている「鏡」あるいは「眼」とは、「初まりにして終わり」あるいは「最初にして最後」である永遠なるものが、自己自身を見ようとする「鏡」であり「眼」である。この譬喩のうちには、永遠なるものが「自己自身を求めようとする意志 (der Wille, sich selber zu suchen.)」⁽⁷⁾が表現されている。ペーメはまたこの「眼」を「無底の眼 (des Ungrundes Auge)」とも呼び、次のように述べている。

「かくして無底は自己のうちを見る。そして自己自身を見出す。」

(傍点筆者)⁽⁸⁾

「無底」という言葉は以上のような文脈において現われている。ところで、このような「無底」という言葉に結実する「永遠なるもの」は、この著作では「火 (Feuer)」として表現され、それは次のような「諸形態」を取ることが述べられている。それらの「諸形態」は「無底」が自己のうちに見出す自己自身の諸相であると言えると思う。上述の「無底」という言葉が現われる文脈と重なるところがあるが、再度確認すると次のようになる。

- ① (永遠なる意志) 最初にあるのは先に述べたように「永遠なる意志」としての「無」あるいは「永遠なる自由」である。ここにはまだ「苦悶」も「変転」もなく、「静寂と平安」のみがある。⁽⁹⁾
- ② (渴望) この「永遠なる意志」はまず「渴望」としてある。それは自己自身を渴望し、自己自身を孕む。この最原初の渴望的動きが上述したように、

「眼」あるいは「鏡」の譬喩において表現される。(10)

- ③ (不安-苦悶)「渴望」の自己懐胎によって「闇」が生じる。しかし「永遠なる意志」は「闇」であろうと欲しない。ここに「永遠なる敵対と反意志」が生起し、それは「大いなる不安」を惹き起こす。(11)
- ④ (火の閃光)暗黒化と自由への希求という両方向への引き合いによって生じる「不安」の只中で、突如「閃光 (Blitz)」が現われ、「闇」を焼き尽くす。ここで神は「我は焼き尽くす火なり」と言われる。(12)
- ⑤ (光と闇)「閃光」の出現によって「光」と「闇」という「二つの原理」が生じる。「光」は「喜び」であり、「闇」は「苦悶」である。それはまた「光=生命」と「火=生命」とも呼ばれる。(13)
- ⑥ (一つの本質のうちの二つの原理) この「光」と「闇」という二つの原理は「一つの本質」のうちにある。「火=生命」は「光=生命の原因」であり、「光=生命」は「火=生命の主」である。一方は他方なしには無であり、両者は互いに属しあいつつ、しかも互いに分かれている。(14)

ベームはここで聖書の言葉を引用する。すなわち「神は六日でこの世界を創造された」と言い、やがて「静寂」が訪れ、七日目の安息日となった、また「そこで初まりと終わりとが一つとなった」と述べている(15)。

ベームにおいては「無底」は以上のような「諸形態」を取るものすべてであり、したがってそれはまずそのような神性の「根源態」の全体を意味するものであると言えると思う(16)。また「無底」は「無であり、しかも一切である」と言われるが、換言するならば、それは「永遠の闇」でも「永遠の光」でもなく、しかも「永遠の闇」でも「永遠の光」でもあるものであると言えると思う。(17)

註

- (1) *ibid.*, Dritter Band, IV. Psychologia Vera, oder Vierzig Fragen von der Seelen, S. 8
- (2) *ibid.*, S. 9~10
- (3) *ibid.*, 8~9
- (4) *ibid.*, S. 9
- (5) *ibid.*, S. 11
- (6) *ibid.*, S. 11

- (7) *ibid.*, S. 12
- (8) *ibid.*, S. 11
- (9) *ibid.*, S. 10~11
- (10) *ibid.*, S. 11~12
- (11) *ibid.*, S. 12~13
- (12) *ibid.*, S. 13
- (13) *ibid.*, S. 16~21
- (14) *ibid.*, S. 21
- (15) *ibid.*, S. 24
- (16) ベーメはこれに続いて他の作品と同じように第七の形態について述べている。そして、この作品ではさらに第八、第九、第十の形態まで展開されている。第七の形態においては「無底」が「根底」へと出るところが構想され、第八、第九、第十の形態は「根底」へと出た以降の問題が展開されていると、言えると思う。
- 第七の形態については、おおよそ次のようなことが述べられている。
- 「二つの原理」が「一にして二」であるところ、そこから「本質存在性」すなわち「身体性」が生じる。それは「永遠なる渴望の充実」であり、「永遠なる糧」である。ここにおいて「神性の喜び」は増加し、完全となる。
- (*ibid.*, S. 49~50)
- (17) このような意味での「無底」を的確に取り出しているものとして、シェリングの『自由論』を挙げることができる。例えば、シェリングはそこで「無差別」としての「無底」について、次のように述べている。
- 「それゆえ、あれでもなく、これでもない (*weder-noch*) から、すなわち無差別から直接に二元性が生じてくる。」(*Schellings Werke, Originalausgabe, VII, S. 407*)

第二節 魂

上述したように「無底」は「神性の深み」として、神の自己産出あるいは自己認識の初まりにして終わりであるところを意味する。そして、魂はまさにその神の自己産出あるいは自己認識の「中心」から由来するものとして、「無底的自由」をもつものでもある。次のように述べられている。

(一つの枝としての魂) 魂は神という「樹から由来する一つの枝 (*ein Zweig aus dem Baume*)」である。魂は神が自己産出あるいは自己認識のために把

捉した「自然の中心」から生じており、「三つの原理」すべてがそのうちにある。それはそもそも「同一のものをもちたいという願望が、神の核心において目覚めた」ことに起因している。しかし、魂の意志は自由である。すなわち、神という樹の一つの枝として繁茂するか、あるいは「一本の固有の樹 (ein eigener Baum)」であることを欲するかは魂の自由である。前者は「神の似姿」と呼ばれ、後者は「ルチフェルの似姿」と呼ばれる。(1)

(二つの眼をもった球) この事態をベームはまた次のような「眼」の譬喩において表現している。枝が樹から生じ、その形は樹に等しいように、また母が子を産み、その子の姿は母に似ているように、魂は「神の眼」に等しい「円い球 (runde Kugel)」である。それは二つの部分、「背中合わせに立つ二つの眼 (2 Augen, welche rücklich stehen.)」に分かれている。すなわち、それは「聖なる神的な眼」と「地獄の憤る眼」とである。(2)

ところで、この魂の眼の二重性はそもそも「神の眼」の二重性に由来する。次のように述べられている。

「それゆえ神の眼は二重であり、先に図解したように、背中合わせに立っている。すなわち、一方は自己の前へ、静かな永遠へ、永遠の無へ、すなわち自由へと進み、他方は自己の背後へ、渴望へと進み、その渴望のうちで闇を生ぜしめ、そしてそこで自然の中心を形成し、それを大いなる不安と過酷さにまで駆り立てる。」(3)

前者の「永遠の無」あるいは「永遠の静寂」へと向かう「神の眼」にはまさに何も映じない。これに対して後者の「渴望」において引き寄せられた「闇」あるいは「自然の中心」において、神は自己を捉える。そして、この「闇」あるいは「自然の中心」からすべてのもの、したがって魂も生じるのである。その際、「神の似姿」としての魂のうちへは「神の眼」の二重性がそのまま移される。次のように述べられている。

「あなたはあなたの魂のうちに二つの眼をもっている。それらは互いに背中合わせに立てられており、一方は永遠を見、他方は自分の背後に自然を見ている。」(4)

ベームにおいてはこのような「神の似姿」としての魂のあり方から、魂の自由が考えられている。次のように述べている。

(魂の固有の生) 魂は「全体の一つの像」あるいは「全体の一人の子」である。しかし魂は「ある固有のもの (ein Eigenes)」でもある。それは例えば次のように表現される。母と子とは二つの人格である。つまり、生まれた子供は

母の生とは異なる「自分固有の生 (sein eigenes Leben)」をもつ。それと同じ様に神の霊と魂の霊とは二つの人格である。各々は他から自由であり、しかも両者ともに「第一の始源 (der erste Anfang)」のうちに立ち、各々が自分の意志をもっている。それゆえ、魂は「神の似姿」となることも、「傲慢な悪魔 (ein stoltzer Teufel)」となることも可能である。以上のように述べている。(5)

魂は神性の自己認識の射影点としての「永遠なる自然」から生じたものである。この「永遠なる自然」は、神のうちでは「永遠なる光」に照らされ「聖なる喜び」に沸き立っている。魂はまさにその「自然の中心」から由来するものとして、一方ではこの喜び溢れる世界へ参与することもできるが、他方ではその「永遠なる自然」の「闇」のなかへ閉じこめることもできるのである。したがって、魂はその意志において、そのような「無底的」な「あれかこれか」の前に立たされているのである。(6)

註

(1) ibid., S. 62~63

(2) ibid., S. 66~67

(3) ibid., S. 84

(4) ibid., S. 85

(5) ibid., S. 69~71

(6) 「西谷啓治啓治著作集」第三巻、154頁参照。西谷啓治はこの点を、プロティノス、アウグスティヌス、エックハルト、ヤコブ・ベーメへと到る神秘思想史の流れのなかでの確に捉え、次のように述べている。

「自覚のかかる両面に同等の重みを与え、一方に於いては神の絶対性と自己の超越的自由及び自存と、他方に於いては、悪と選択的自由とを共に解明せんとする企ては、ひとりヤコブ・ベーメにのみ見られる。」

ま と め

ヤーコブ・ベーメの初期思想を確認するために、『黎明』(1612)、『三つの原理について』(1619)、『人間の三重の生について』(1619/20) および『魂についての四十の問い』(1620) という四つの作品を取り上げた。彼の思想の基底

部にあるものは、これらの作品のなかにはほぼ出揃っていると言えると思う。拙論では、その初期思想のうちでも特にこれ以降の諸作品のなかでも繰り返し論じられ、彼の思想の中核となるものを完全とは言いがたいが取り出してみた。ここでは後の諸作品における展開も視野に入れて、再度以上の初期の四つの作品において提出されている基礎的考え方をまとめて確認しておきたい。

(二つの性質)「二つの性質」とは「善き性質と悪しき性質」であり、それはそもそも諸性質の自然哲学的観察から抽出された「憤激性と柔和さ」「生と死」「善と悪」あるいは「闇と光」等であった。しかし、それはベーメの場合「二つの永遠なる原理」へと遡源され、神・世界・人間理解の基本原理となるものである。すなわち、すべてはこの「二つの性質」あるいは「二つの原理」から成り立っており、そこから理解される。しかも、この「二つの原理」は、「二つの性質」が本来「一つのもの」の「二つの相」であるように、「一つを中心」から由来するものである。それゆえ、それはまた一でもある。ただし、ベーメの場合この「二つの原理」は単に「一つのもの」へと還元されるのではない。それは二でありながら一であり、あるいは一でありながら二である。そういう関係にあって初めて、「二つの原理」はすべてのものの生きた動勢を捉えうる。したがって、ベーメの主張は単なる二元論でも、単なる一元論でもない。その究極の原理となるものは「二にして一」あるいは「一にして二」と言われるべきものである。このような発想が後に「無底」へと徹底・深化される。(1)

(七つの性質)「七つの性質」は「等しく永遠」であり、ベーメはそれらの円環的交互透入的「動き」を「神の聖なる戯れ」と呼んでいる。それは意志的目的論的動き以前の神の「根源態」、すなわち「聖なる喜び」に溢れる神の「根源態」を表現する。すべてはこの喜びに沸き立つ神の「嬉戯」から始まったと言える。「第七の性質」は「身体」あるいは「自然」とも呼ばれるが、「七つの性質」は最終的にこの「第七の性質」において身体化される。そして、この「身体」あるいは「自然」から天使あるいは人間の魂は生じるのである。(2)

(三つの原理)「三つの原理」という言葉はパラケルズスに由来するものと考えられるが(3)、ベーメはこの「三つの原理」によってキリスト教の三一性の思想に彼固有の読み込みを加える。「闇の原質」としての「第一の原理」は「神の生誕の深み」を指示する。そこにおいて神は神自身を産出し、またそこからすべてのものは生じる。「光の原質」としての「第二の原理」によってパラダイスが生じる。天使たちはこのパラダイスにおける喜びを増幅するために創造された。このような永遠なる世界における動きを、ベーメは「聖なる戯れ」

あるいは「永遠の喜びに溢れる愛の戯れ」と呼ぶ⁽⁴⁾。そして「第三の原理」は「第一の原理」と「第二の原理」との顕示であり「この世界の原質」である。この原理によって「闇と光」に支配されるこの世界が生じる。⁽⁵⁾

(無底)「無底」は「無にして、しかも一切である」と言われるが、それはそこからすべてが由来し、またそこへと還っていくペーメ思想の究極概念である。ペーメにおいてこの「無底」という概念が出てくるのは、「永遠なる自由」としての意志の立場が前面に打ち出されてくる時機と深く関係している。すなわち、この意志以前には「闇」も「光」もなく、すべては「無」であり、そこにあるのは「永遠の静寂」のみである。そのような「無」としての自己自身からのみ「永遠なる意志」は発しており、それゆえ「無底的」であり自由なのである。そして、それはまず「眼」あるいは「鏡」に譬えられ、自己自身を見出し捉えようとするものとして、すなわち「自己自身を求めようとする意志」として現われる。したがって、「無底」は「無」であると同時に「意志」であり、それはまずそのような神性の「根源態」を指示するものである。ただし「無底」の意義はそれだけには留まらない。「無底」の無底性は魂との根底的関わりにおいて究められる。

(魂の自由) 魂は「神の眼」と同じ様に二重である。それは一方では「永遠の光」、「永遠の生命」、「永遠の自由」に臨み、他方では「永遠の闇」、「永遠の渴望」、「大いなる不安」へと向かっている。それは、魂が神の「聖なる戯れ」のなかで身体化する「永遠なる自然」に由来することに起因する。「永遠なる自然」は、神のうちではどこまでも「永遠なる光」に照らされ、喜び溢れる生命のうちにある。しかし、その「永遠なる自然」から生じる魂においては、その「永遠なる光」に背を向け、「永遠なる闇」のなかへ閉塞する可能性が開かれている。魂はまさにそのような意味において「無底的」に自由なのである。

註

- (1) このような意味での「無底」に関しては、ポイケルトによるファクシミリ版全集第4巻所収の『汎智学の神秘 (Mysterium Pansophicum, oder Gründlicher Bericht von dem Irdischen und Himmlischen Mysterio, 1620)』あるいは拙訳『ペーメ小論集』(1994年、創文社刊) 9頁から10頁ならびその註(0)を参照。そこでは「かくして二つの生命とまた二つの本質が、唯一の永遠なる無底的根源態から、またその根源態において存在するのである」と述べられ、さらにその根源態に関して「あらゆる方向へ進む丸い球形の車輪」になぞらえられるエゼキエルの車輪の譬喩が挙げ

られている。

またシェリングは『自由論』において、「絶対的二元論」かあるいは「絶対的同一性」という問題の逢着するところとして、このベーメの「無底」の立場を導入している。(Schellings Werke, Originalausgabe, VII, S. 406~408)

- (2) 「七つの性質」はまた「七つの形態 (sieben Gestalten)」(『神智学の六つのポイント』)、「七つの相 (sieben Species)」(『恩寵の選び』) 等と呼ばれている。その七つのもののそれぞれの呼び方も作品によって多少変わるが、それらは内容的にはほぼ一致している。
- (3) ポイケルトによるファクシミリ版全集第一巻のEinleitung[15]参照。
- (4) 「七つの性質」と「三つの原理」との関係については、1624年の『三つの原理の表』に詳しい。そこでは第四の性質である「火」を分岐点にして、それ以前の性質によって「第一の原理」が、それ以後の性質によって「第二の原理」が構成されることが述べられている。
- (5) この「三つの原理」については、ベーメの作品のなかでは1620年の『神智学の六つのポイント』の叙述が明解である。

(教育学部 助教授)